




サプライズ

翔太・明日香

ウェルカム
アベル



サ
プ
ラ
イ
ズ

今日、絶対何かある。

付き合いはじめて三年目の記念日だし、いい天気だし、海が見える展望台があるんだし！

何より、翔太がめちゃくちゃ挙動不審だった。ポケットに何度も手をやっているし、あらぬ方を見て何かぶつぶつ言っている。嘘がつけないことは知っていたが、ここまでとは。

明日香もイメージトレーニングを繰り返した。サプライズに驚いたふりをするのはけっこう大変なのだ。

誕生日のたびに渾身のリアクションを繰り出してきた。翔太の顔にはいつも「サプライズあります」と書いてあったし、ケーキの中からネックレスが出てきたときには「むりやりすぎる(ていうかこれを誰が洗うんだ)」とも思ったが、翔太が自分のことを考えて用意してくれたのが嬉しかったのだ。

きつと今日も、そういうことが起きる。

その時私は、どうやって応えればいいのかな。

「えっ……うそ」いや、違うな。

「きゃー嬉しい！」うーん、わざとらしい。

「イエス！」軽すぎる？

「眉間のシワがすごいけど」

不意に、翔太に顔を覗き込まれる。明日香はその二の腕にパンチした。

「え、怒ってる？」

出会った時、この人と結婚するだろうと直感した。お箸の持ち方がきれいで、これからも一緒に食事をしたいと思った。シワや吹き出物の指摘をしてきたりとデリカシーに欠けるところはあるが、裏表のない、温かい人だ。

慎重派の明日香と直感型の翔太は性格も正反対だ。だからこそ、互いを支え合って楽しく過ごせる。

だから、返事なんて考えるまでもなかった。

私はこの先もあなたと一緒にいる。もう決めている。

明日香は密かに深呼吸をする。

いつどこで何を言われても、大丈夫。

私がどんな反応をしたって、翔太は笑って受け止めてくれる。これまでも、そうだったのだから。

やっべえ。

翔太は背中に汗をかいていた。

付き合って三年目の記念日だし、いい天気だし、明日香が前から行きがかったいたカフェだし、それを俺が予約をしたし、海が見える展望台もあるし。これぜったい期待されてるだろ。

シミュレーションには余念がなかった。食事をして、ちよつと散歩する？ って声をかけて、展望台に行つて。人が多いかもしれないけれど、景色がよく見える場所を確保して。

出会ってからあつという間だったねとか言つて。

いままでありがとう、これからもよろしくお願いします。これからも、ずっと。

それで、指輪を出す。ひざまずいたほうがいい？ でも明日香はフラッシュモブだけは死んでもやめてくれと言っていたし、注目を集めるのは嫌がるよな。サプライズもいらないうつていつも言うけど、誕生日に驚かせるとすごく喜んでくれるんだ。そういうところ、すごくかわいい。

手を繋ぐふりをして、こっそり指輪を握らせようかな。「あれ？ 翔太の手になにかあるよ」つて明日香が気づいて、「見てみ」つて俺が言つて、明日香が手を開いたら中に指輪が……

よっしゃこれだ！

何度もイメージトレーニングをした。仕事のプレゼンでもここまでしない。頭が冴えずぎて、昨日は深夜まで眠れなかった。ベッドに寝転んで、指輪を眺めていた。

そして今朝、寝坊した。慌てて家を飛び出した。今日ばかりは遅刻したくなかったのだ。

指輪を忘れたと気づいたのは、明日香と合流してからだった。

無意識の俺、ポケットに指輪をいれたりして……ませんよね。

何度もポケットを探ったが、入っているわけがなかった。コーヒーじゃなし、通りすがりの店で買うわけにもいかない。選びに選んで買った指輪なのだ。隣を歩く明日香をふと見ると、なぜか難しい顔をしていた。機嫌が悪いのだろうか？

「眉間のシワすごいけど」

そう言うと、キレッキレのパンチを食らった。

「怒っている人に怒ってる？　って聞けるところは翔太の長所であり短所だよ」

「どういうこと？　明日香の言うことは難しいんだ」

「いまのは褒め言葉」

「ますますわからん」

明日香は笑った。眉毛が下がり、白い歯がのぞく。初めて会ったとき、なんてかわいく笑うんだろうとひそかに見惚れた。その笑顔を明日も見たい、明後日も見たい。気づいたときには連絡先を聞いていた。その場限りで別れるなんてできなかった。

正直に言ってしまうか。今日プロポーズするつもりだったんだけど、指輪を忘れてきちゃったんだって。

「わざわざ言うなんて正直すぎる」と明日香は言うだろう。そして、笑ってくれるだろう。また改めてしてね、と言ってくれるだろう。

——だけどこんなグサイことあるか？

絶対へんな空気になる。俺が申し訳無さに耐えきれない。さんざん期待させといて実は何も無いなんて黒歴史決定。「プロポーズしようと思ってた」けど「しない」っていちばんダメじゃないか。指輪なしでプロポーズするか？　それもアリか？　だけどせっかく用意したのに。

頭はぐるぐる回っている。

今日はプロポーズのブの字も無いようにふるまうしかない。

三年目の記念日のお祝いなんだから。

何もなかった。

翔太は家まで送ってくれたが、そのまま帰ってしまった。月曜からの仕事の準備をするらしい。

ごはんはおいしかったし、インスタでチェックしていたプリンも食べた。天気も最高で、風も気持ちよくて、海は澄んでいた。私も翔太もたくさん笑った。素敵な日だった。

ずっと期待していたんだ。胸にぽっかりと穴が空いたようだ。サプライズは嫌いとか言っておきながら、私、ずっと期待していたんだ。

ばかみたい。ひとりで舞い上がってしまつて。恥ずかしさと自己嫌悪で、玄関にしゃがみこんでしまった。

私の期待、顔に出ていたかな。翔太にばれていなかったかな。もし気づかれていたんなら、ほんとに恥で死ぬ。

のそのそと靴を脱ぎ、化粧を落としてシャワーを浴びた。何をする気にもならず、そのままベッドに潜り込む。スマホで今日の写真を眺めているうち、涙が滲んできた。ひとりでいることが、すごく寂しくなつてしまった。

私はこの先も、ずっと翔太と一緒にいたいよ。

だけど、この気持ちを言葉にして伝えたことがあつたかな。

サプライズしてくれたら、怒つてる？　って聞いてくれたり。いつも心を開いて

くれるのは翔太だった。私はそこに甘えて、口を尖らせたり笑つたりしているだけだった。

スマホの画面いっぱい、二人の笑顔が広がっている。背後には青い海が輝いていた。

「たのしかったな」

もう一度、あそこに行こう。私から誘おう。

それで、私から言うんだ。これからも一緒にいてくださいって。

結婚してくださいって言うんだ。

彼女の方から言つて、何の問題があるだろう？　私は私の心を、正直に伝えるだけなんだから。

ぼろぼろと涙をこぼしながら、明日香は写真を見つめた。そのうち、眠りに落ちていた。

しばらくして、物音で目が覚める。時計を見ると、すでに深夜だった。

「え、なに？」

ゆつくり、鍵が回る音がする。ドアノブの軋む音、そして玄関のドアが開く。

「うそ」

誰かが侵入してきたのだ。たとえオートロックだろうと、不審者に侵入されたという話は枚挙にいとまがない。どうしよう、警察を呼ばなきゃ。そう思うものの、恐怖で体が動かない。呼んだところで、警察が来てくれるまで私はどうやって身を守ればいいのか。

「助けて……」

助けて翔太！

足音がゆっくりと近づいてくる。明日香は意を決し、ベッドから滑り出て本棚に近寄った。手探りで分厚い本を取り出す。武器になりそうなものはこのくらいしかない。襲ってきたらこれを投げつけて逃げるんだ。

体を震わせながら、明日香は本を抱えた。不審者の足が、キシ、と床を鳴らす。

「な、なんかハアハア言ってる……」

不審者が興奮しているのだろうか。ドアの向こうから、上気した呼吸が聞こえてくる。

もうだめだ、恐怖に耐えきれない。そう思うと同時に、部屋のドアが開いた。

「きゃあああー！」

「うわあああー！」

間一髪、本の攻撃をかわした不審者が明日香に近づく。

明日香は絶叫しながら逃げ回った。

「いやあー！」

「明日香！」

「助けて！」

「落ち着けてばー！」

「翔太あー！」

「俺だよ！ 翔太！」

翔太は慌てて部屋の明かりをつけた。大暴れしていた明日香の動きがびたりと止まる。髪を振り乱し、涙で顔がぐちゃぐちゃになっていた。

「し、翔太？」

「ごめん、まさか起きているとは思わなくて。ていうか俺は合鍵持っているんだから、部屋に入ってくるなら俺だろ」

確かに翔太に鍵を渡してはいるが、こんな夜中に入ってくるとは誰が思うだろう。「そんなの！ わかるわけないじゃない！ 驚かせないでよ！ 連絡いれなさいよ！」

「起こしちゃ悪いと思って。あと、目が覚めたときに薬指に指輪があるってサブライズもいいかと……」

翔太がゴニョゴニョつぶやくと、「なに？ 聞こえない！」と明日香がますます怒った。恐怖がゆるんだせいかわ、涙がぼろぼろこぼれている。

「なんかハアハア言ってたし！ なんで私の部屋に入るのにハアハア言うのよ！ 帰ったんじゃないの？」

「こんなふうにさせるつもりはなかったんだけど……」

翔太は困り顔で頭を掻いた。

「一回家に帰ったんだけど、やっぱり今日言いたくて。終電ないから、自転車来た」

「自転車で？」

思わぬ答えに明日香は面食らった。おかげで涙も止まった。同じ沿線とはいえ、自転車で来るには距離がある。息が切れていたのはそのせいだったのか。

「これ、渡したくて」

翔太はポケットから小さな箱を取り出した。おずおずとひざまずき、ゆっくりと箱を開けた。中には、小さなダイヤが乗った指輪が入っている。

「三周年。いままでありがとう。これからもよろしくお願いします」

明日香は、乱れた髪と濡れた頬のまま、しばらく指輪を見つめていた。

「俺と、結婚してください」

しばらく動きもしない明日香に、翔太の顔がだんだん不安げになってくる。

「明日香……？ 怒ってる？」

「お、こっ、て」

明日香は混乱を鎮めるように乱暴に髪を掻いた。

「ない、けど」

私はどんな返事を考えていたんだっけ。「えっ……うそ」「きゃー嬉しい！」「イエス！」？

全部吹っ飛んでしまった。

「どんなサブライズよ……」

会いたいと思っていた人が、ここにいる。
眉尻が下がる。白い歯がのぞく。翔太が一目惚れした笑顔だった。
そして明日香はゆっくりと、翔太に向けて左手を伸ばした。



本日はご多用のところお越しくさださいまして、誠にありがとうございます。皆様に見守られて今日の日を迎えることができ、とても幸せです。

まだまだ未熟なふたりですが、力を合せて笑顔溢れる家庭を築いていきます。

これからもどうぞよろしく願ひいたします。

翔太・明日香

2022年2月22日

著者 塚本はつ歌 ©2022 Hatsuka Tsukamoto

ウェルカムノベル <https://welcomenovel.com> @welcomenovel

この作品は、新郎新婦の実話をもとにしたフィクションです。